増補 近代日本文学における朝鮮像

朴春日 著

未来社

増補 近代日本文学における朝鮮像

朴春日 著

未来社

【著者略歴】

朴春日（パク・チュンイル）

1933年生まれ。1956年，法政大学文学部日本文学科卒。教師，記者，大学講師等を経て現在，月刊総合誌『統一評論』編集長。

主な著作には『近代日本文学における朝鮮像』（1969年，未来社刊），『紀行・朝鮮使の道』（1974年，新人物往来社刊），『太陽への飛翔』（1978年，朝鮮青年社刊）などのほか，多くの訳書，論文がある。

増補　近代日本文学における朝鮮像

1969年11月28日　初版第1刷発行
1985年8月15日　増補第1刷発行

定価 2000 円

著者　朴春日
発行者　西谷能雄
発行所　株式会社　未来社
東京都文京区小石川3の7
電話（814）5521＝代表
振替番号・東京 7-87385
整版・ふじ活版　印刷・萩原印刷
装本・形成社　製本・今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

増補　近代日本文学における朝鮮像　目次

はじめに……七
増補版によせて……一九
第一章　嵐の時代（一八六八～一九一二年―明治期）……二〇
1　日本の朝鮮侵出と「征韓」思想の系譜……二〇
2　壬午軍人暴動と好戦文芸の横行……三三
3　一八八四年の政変と『佳人之奇遇』……四一
4　乙未事変と与謝野鉄幹の周辺……五〇
5　小杉未醒の反戦詩と『敬愛なる朝鮮』……六六
6　木下尚江・小野有香・夏目漱石……七七
7　「韓日合併」と石川啄木の危機意識……九〇
第二章　風雪の時代（一九一二～一九二六年―大正期）……九九

1　植民地風物詩――高浜虚子の『朝鮮』……九九
2　森鷗外の『佐橋甚五郎』をめぐって……一〇六
3　追われゆく朝鮮農民……一一
4　三・一人民蜂起と『カンナニ』……一一六
5　ある良心――吉野作造と柳宗悦と矢内原忠雄……一二四
6　流浪とたたかいと……一三一
7　朝鮮を旅する人びと……一三八
8　関東大震災と朝鮮人大虐殺……一四四
9　連帯をもとめて……一五一

第三章　抵抗の時代（一九二六～一九三五年―昭和期1）……一六〇

1　『傷だらけの歌』とは何か……一六〇
2　カムサッカで、日本で……一六五
3　日本プロレタリア詩と朝鮮……一七四
4　黒島伝治・伊藤永之介・山内謙吾・岩藤雪夫……一八七

5　抗日パルチザンと槇村浩……一九四
6　「一視同仁・内鮮融和論」の展開……二二五
7　ある舞姫の像……二三一
第四章　戦争の時代（一九三五～一九四五年―昭和期2）……二三六
1　『冬の宿』と『李永泰』……二三六
2　丸山薫・中原中也・佐藤惣之助……二三五
3　みのらぬ愛のかたち……二三九
4　「皇国臣民」運動の実態……二四五
5　解放の日ちかく……二五二
八・一五朝鮮解放と日本文学……二七一
戦後日本文学のなかの朝鮮像……二九五
〝韓国ブーム〟の虚像と実像……三二七
――近代日本報道・出版史の一断面――

1 「征韓論」と朝鮮地図……三三八
2 最初のブームは「京城事変」……三三三
3 福沢諭吉と新聞の侵出……三三七
4 「韓日併合」と「日鮮同祖論」……三四〇
5 植民地朝鮮の「墓誌銘」……三四七
6 「大東亜共栄圏」の実現めざして……三五一
7 張赫宙と雑誌『三千里』……三五四
8 日本語強要の先兵たち……三五七
9 『モダン日本・朝鮮版』の企図したもの……三六三
10 「聖戦遂行」と妓生……三六七
11 〝魑魅魍魎の時〟……三七一
あとがき……三七九
増補版あとがき……三八一
付・関係資料年表……三八五

増補　近代日本文学における朝鮮像

はじめに

——問題提起によせて——

（一）

民族的独立と自由と平和をめざす作家たちの国際的交流と連帯の運動には、さまざまな方法と形態が必要である。

「作家間の最高の友情行為」といわれる翻訳活動はその重要な一部分であり、これまでの歴史は、世界各国の文学、科学および文化に関する諸作品の翻訳・出版が、人類全体の文明と文化の宝庫をゆたかにする上で、きわめて重要な役割を果たしていることを教えている。

とくに現在、帝国主義と新旧植民地主義に反対するたたかいを自己の崇高な任務としているアジア、アフリカ、ラテンアメリカの作家たちが、帝国主義者の利益に奉仕する翻訳・出版につよく反対し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の民族解放、完全独立および平和をもとめる作品の翻訳に大きな関心をはらっている事実は、きわめて重要な意味をもつ。

そして、これらアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の連帯精神を強化し、相互の文化交流を促

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

進するための翻訳の役割は、こんごますます重要さを増し、貴重な位置をしめてゆくだろう。

しかしこれは、ある意味ではまったく基本的な問題の一つであり、かつてひらかれた国際的な作家会議の報告や議事録を例にとるまでもなく、もはや自明の問題であって、反帝国主義・反植民地主義の戦線に位置する文学者たちにとっては周知の課題である。そしてそれは、すでにアジア、アフリカ、ラテンアメリカおよび世界の進歩的な作家間において実践に移されている問題でもある。

したがって一方では、文学における国際的な交流と連帯の運動をただたんに、翻訳や紹介だけにとどめるならば、それはより多くの成果をもたらさないであろうという見解も生ずる。

そこで考えられることは、翻訳活動の量的な、あるいは質的な発展をはかると同時に、ある一個の民族文学の内側にある国際的な側面をきりひらくこと——すなわち、その一個の民族文学が他の国家と民族をどのようにとらえ、どのように形象してきたのか、を明らかにするという新しい問題が提起されるであろう。

たとえば日本文学は、その総体からみれば日本の社会と人間を映しだす「鏡」であると同時に、近隣諸国の社会と人間をも映しうる「鏡」でもある、ということだ。

もちろん「鏡」自体が歪んでいる場合もあり、またそれは変化していくが、それらをふくめて、ある一個の民族文学がとらえた外国の社会像や人間像を発掘し研究するといった問題である。

こうした作業は、ある一個の民族文学における国際的な側面を明らかにするであろうし、それによって形成され、蓄積された他の国家への社会観なり人間観の変遷をも明らかにするであろう。そしてそれは同時に、内側では個々の文学作品にたいする多角的な評価、あるいは再評価の問題をも生むは

ずである。

現在、帝国主義と植民地主義に反対してたたかう作家たちの真の連帯をつよめ、ふかめるうえで、これらの作業が少なからぬ示唆をあたえるであろうことは論をまたない。

なぜなら、作家はつねに、その国の人民の良心とならねばならず、世界の数十億の人民の良心とならねばならないからである。

（二）

周知のように、日本文学はその一つの側面として、古代からさまざまなかたちで朝鮮をとらえ、朝鮮民族の像を刻んできた。そしてそれは、断片的であるように見えながらも体系的なものをひめ、変化しながらこんにちにおよんでいる。

『古事記』や『日本書紀』に頻出する朝鮮関係の記述はさておくとしても、『万葉集』に見られる具体的な文学形象――たとえば、麻田連陽春の「韓人の衣染むとふ紫のこころに染みて念ほゆるかも」という歌や、山部宿禰赤人の「百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも」という歌、あるいは「楮衾新羅へいます君が目を今日か明日かと斎ひて待たむ」（作者未詳）という素朴な歌などは、古代日本人の日常生活にまでかかわった一つの「朝鮮」の姿をよくしめしているといえよう。

また、『懐風藻』や『文華秀麗集』などに見られる朝鮮の使者と日本文人との詩文の贈答は、交流史の上からいっても貴重な位置をしめるといわなければならない。

「風土記」のたぐいにしてもそうである。北九州諸国の『豊前国風土記』、『筑前国風土記』、『筑

紫風土記』にはとくに朝鮮関係の記述が多いが、『出雲国風土記』、『播磨国風土記』、『常陸国風土記』とならんで総合的な検討がくわえられるならば、これらの伝承から重要な側面がきりひらかれるにちがいない。もちろん、史実という点ではたんに「風土記」にとどまらないであろう。「記紀」からはじまって『続日本紀』、『新撰姓氏録』、『文徳実録』や『三代実録』、あるいは『大鏡』など数えあげればきりがないが、これら朝鮮関係の記事をどのように位置づけ、評価するかは、やはり歴史学研究の成果を待つ以外にはない。

その意味では、さいきん日本の歴史学界につよい衝撃をあたえ、大きな波紋をまき起こしている朝鮮民主主義人民共和国の社会科学院院士金錫亨（キムソクヒョン）氏の論文――『三韓、三国の日本列島内の分国について』（一九六三年）と、やはり同氏の著になる『初期朝・日関係の研究』（一九六六年）は、きわめて画期的な意義をもつといえよう。

金錫亨氏によれば、初期朝・日関係（紀元前三世紀から紀元七世紀中葉までをさす―朴）の基本的な内容は、「国家対国家の関係なのではなく、わが朝鮮住民の日本への移住――進出からはじまり、そこで千年以上も故国の旗をかかげていた朝鮮の移住民と、よりたちおくれた状態にあった原住民とが国家勢力を形成し、かれらが朝鮮故国の国ぐにと結んださまざまな関係を内容としている」のである。

したがって、その歴史は「わが同胞の進出の歴史であり、主としてわが朝鮮文化の伝播の歴史であり、したがってそれは、朝鮮にたいして日本がもっていた従属的関係の歴史」なのである。

きわめて科学的に、きわめて実証的に新しい境地をきりひらいている同氏の研究は、結論的にいって「初期朝・日関係の歴史のおもな内容は、日本の学者たちがいっているように、日本の南部朝鮮支

配と経営にあるのではなく、それとは正反対に、わが朝鮮の国ぐにによる西日本開拓と、朝鮮人が日本歴史の発展の上で果たした文化開拓者的、先進的役割」を明らかにしたものであるが、この説から出発すれば、これまでの一切の朝・日関係史の叙述と、それが根拠にしているもろもろの資料は、この観点からまったく新しく解釈しなおさなければならなくなるし、古代日本文学における朝鮮像も例外ではなくなる。

したがって「記紀」に頻出する朝鮮関係の「史実」はむろんのこと、そのなかの伝承も、歌謡も全面的に検討しなおされなければならず、『万葉集』にいたっては、新羅の吏読と万葉仮名の密接な関係はいうにおよばず、またほんの一例にしかすぎないが、「斯くのみにありけるものを萩が花咲きてありやと問ひし君はも」とうたった金明軍は、「帰化人」の金明軍などではなく、日本に進出した朝鮮移住民の一人である金明軍であったと解釈しなければならない。

こうした観点から出発すれば、古代日本文学の総体を見なおす問題にまで作業が発展することは自明の理である。

しかし時代がずっと下って、『太平記』の「高麗人来朝事」あたりになると、倭寇問題からはじまる当時の朝・日両国の修好成立がきわめて明確にうかびあがってくるし、こんにち知られた日本人の朝鮮紀行のなかで、もっとも古いといわれる『尊海渡海日記』（一五三九年）などが見えてくる。

もっともこの「日記」は、ついさいきんまでは全文が一般に流布されず看過されてきたものであるが、同じような意味で一九六五年にはじめて公刊された僧慶念の『朝鮮日々記』（一五九七年）は、きわめて重要な意義をもつ記録文学だといえよう。

これは豊臣秀吉の朝鮮侵略に一医僧として従軍させられた安養寺（大分県日杵市）住職慶念の歌日記であるが、筆者の侵略戦争へのはげしい憎悪とのろい、朝鮮民衆の上にはせる思いと人間的な苦悩は、そのまま秀吉への痛烈な糾弾となり、告発ともなっている。

周知のように、豊臣秀吉の朝鮮侵略を主題にした戦記物は、堀正意の『朝鮮征伐記』をはじめ馬場信意の『朝鮮太平記』、山崎尚長の『朝鮮征討始末記』など、また大河内秀元のいわゆる『大河内物語』に代表される従軍諸将の日記や絵本類まで、おびただしい数にのぼっているが、それらと『朝鮮日々記』を比較すれば、その違いは一層はっきりとするだろう。「このような尊い立派な記録を残した日本人が三百七十余年前に存在したことはわれら日本人の誇りとさえ思う」と内藤雋輔氏が書いているが、当然であろう。

江戸時代に入ると、なんといっても一六〇七（慶長十二）年から一八一一（文化八）年まで、前後十二回にわたった朝鮮使節の来日にともなう学術文化の親善交流をあげなければならないであろう。

対馬の儒者雨森芳洲の『隣交始末物語』や『交隣提醒』、松浦霞沼の『朝鮮通交大記』はともかくとしても、新井白石の『折たく柴の記』や、かれが朝鮮使節と筆談した記録『江関筆談』、同じく林羅山の『韓客筆語』、あるいは朝・日両国の文人たちによる詩の唱和集、たとえば『和韓唱和録』や『善隣風雅』、『両関唱和集』、『長門戍辰問槎』などはあらためて見なおす必要があり、『朝鮮人来聘記』や『朝鮮人大行列記』のような絵入りの通俗読物出版も、当時の交流を知る上で好個の資料となるはずである。

また並木五瓶の名作といわれる『韓人漢文手管始』も、朝鮮通信使の来日にまつわる話だけに興味

ふかいものがあるが、洪滄浪（ホンチャンラン）と人見鶴山の友情は、その詩作をふくめて想起すべき重要なことがらである。

ともあれ、これらは、日本の文人が朝鮮の文人たちと接触することによって、「異常な文化的感銘をうけたことに由来する」（中村栄孝）が、いわゆる江戸文化を新しい角度から見つめる意味においても、この約二百年にわたった朝鮮使節の来日、そしてそこから生まれた学術文化上の影響を明確にすることは、きわめて重要な意義をもつであろう。

むろんこの時期、一方においては、たとえば中井積善が『草茅危言』で、「神功の遠征以来、韓国服従朝貢し、我が属国たる事、歴代久しく絶えざりしに、今の勢ひ、これに異なり……」とのべるような発想の流れがあったことは否定できない。

この「記紀」いらいの朝鮮にたいする伝統的な「朝貢国」意識は、近代にいたって一層むきだしなものになるが、その作品における朝鮮像の推移は、なによりも日本人の朝鮮観の変遷を物語る一つの内容となるだろう。

（三）

さいきん日本の著名な歴史家である旗田巍氏は、その労作『日本人の朝鮮観』（アジア・アフリカ講座『日本と朝鮮』第三巻）で、つぎのように指摘した。

「いま日本は朝鮮を昔のままの形で支配しているわけではない。しかし、またも新しい形の植民地的支配が進められようとしている。それだけではない。かつて形成された植民地支配者の朝鮮観がい

まも根強く残っており、現実の植民地支配には無縁の若い世代の心にもひろまっている」と。そして、犯罪的な「韓日条約」は、朝鮮人民のはげしい糾弾と日本人民をはじめとする世界各国人民のつよい反対にもかかわらず、強引に「批准」されるまでに至った。

しかし朝鮮人民は、そのいかなる「取り決め」も認めていないし、その無効を現実のものとするために、より強力なたたかいを展開しつつある。

周知のように、「韓日会談」の本質は、第三次会談首席代表久保田貫一郎の「日本の朝鮮統治は朝鮮人に恩恵をあたえた」という恥知らずな暴言（一九五三年）、第四次会談代表沢田廉三の「われわれは三度たって三十八度線を鴨緑江の外におしかえさねば、先祖に対し申しわけない。これは日本外交の任務である」という侵略主義むきだしの妄言（一九五八年）、あるいは池田勇人前首相の「朝鮮を合併してからの日本の非行にたいしては、私は寡聞にして存じません」というそぶき（一九六三年）、そしてさいごの日本側首席代表をつとめた高杉晋一の「日本は朝鮮を支配したというが、わが国はいいことをしようとした。……もう二十年、朝鮮をもっていたならよかった」という鉄面皮な放言（一九六五年）などに集約されている。

そしてこれらが一致してめざすところは、故大野伴睦自民党副総裁がいみじくも吐露したように、「アメリカと手をにぎって、韓国と台湾をふくめた日本合衆国をつくるべきである」という侵略構想である。

いうまでもなく、こうした構想は、かつて喧伝された「八紘一宇」の精神による「大東亜共栄圏」なる構想と同一のものであり、日本がその「東亜の盟主」たる「光栄」をになおうというものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com